

Case 3

ビジネスの本質は新しいものを生み出すこと 探究を通して、成すべきことを感じる感性と 学びの目標を自分で決める力が育つ

 大阪ビジネスフロンティア高校
(大阪・市立)



教頭
藤 宏美先生



校長
川口 伊佐夫先生

専門性を活かして、新しい
ビジネスを創出できる人材を

大阪ビジネスフロンティア高校(以下

OBF)は、3校の商業高校を統合して開校した7年目の新しい学校だ。単なる「商業」ではなく、「ビジネス」のプロフェッショナルの育成を目標とし、設立時から特色ある教育で注目されている。従来の商業科では、資格検定に通ることが目標となっていました。商業科の学びは仕入や売上の会計知識の学びと考えられてきた。しかしIT化、AI化された現代社会では、簿記や会計の資格だけもっていることがアドバンテージとはならない。

資格や専門性を活かして新しいビジネスを生み出せる人材、グローバルで活躍できる英語とビジネスに長けた人材の育成を目的とし、卒業後も学びのモチベーションをもち続ける生徒を育てようとしている。

そのために、従来の商業高校よりも英語の単位を多く設置するとともに、探究型学習に力を入れている。同校の特色として、高大接続7年間を見通したカリキュラムを組み、学び続けたい生徒には連携5大学に特別入学制度があるが、高大連携科目である1年生の「ビジネス基礎」、2・3年生の「ビジネスマネジメント」、3年生での「課題研究」が探究型学習と位置づけられている(図1)。また、地域連携や産学連携の連携の取り組みも多々ある。

学びのテーマを常に意識
課題を察知する感性が高まる

1学年の「ビジネス基礎」や2学年の

「ビジネスマネジメント」では、同校オリジナルのテキストを活用してビジネスの基本を学ぶ。また、連携大学の教授や会社経営者などの外部講師による特別講座や、実際の企業の財務分析や調査などに取り組み演習を行うことで、生徒の社会やビジネスへの関心を高めている。

そのうえで、3学年の「課題研究」では、生徒は自分の興味や好きなことからテーマを発想。それを1・2学年で学んだビジネスの手法と結びつけるように指導されている。例えば、サッカーが好きな生徒であれば、球団経営をテーマとするなどだ。同校では、海外研修や外部講師の講義の際などさまざまな場面で、「この取り組みで自分は何を学ぶのか」という学びのテーマを生徒自身が考える習慣づけをしている。常に課題感をもって学校活動を行っているため、「課題研究」のテーマ設定で悩むことはほとんどないという(図3)。

テーマを立てたら、まずクラスメイトの前でそれを選んだ理由を発表する場がある。その後、情報収集やプレゼンする方法、論文の書き方などを学びながら、並行して個人の研究を進めていく。2月に最終論文にまとめた後に、クラス発表、代表者による学年発表、2年生対象の発表と、発表の場が多数用意

図1 大阪ビジネスフロンティア高校の教育課程

	共通科目	英語	情報	会計	高大接続科目	探究型学習
1年	国語総合(4)	現代社会(2)	数学I(3)	科学と人間生活(2)	体育(3) 保健(1)	総合英語(4) 英語表現(2) 情報処理(3) 簿記(5) ビジネス基礎(3) HR(1)
2年	国語演習(4)	日本史B(2)	数学A(2)	化学基礎 生物基礎(2)	体育(2) 保健(1)	英語理解(4) 英語表現(2) ビジネス情報(4) 財務会計I(3) 原価計算(3) ビジネスマネジメントI(3) HR(1)
3年	現代文B(4)	日本史B(2)	世界史A(2)	数学演習(2)	体育(2) 家庭基礎(2) 音楽I 美術I 書道I(2)	英語理解(4) 選択A(2) 選択B(2) 選択C(2) 課題研究(3) ビジネスマネジメントII(3) HR(1)

※小誌Vol.403「先進校に学ぶキャリア教育の実践」参照
http://souken.shingakunet.com/career_g/2014/07/2014_cgvol403_42.pdf

取材・文／長島佳子

されている(図2)。仲間の発表を聞くことで自分の課題を見直したり、発表台に立つ機会を増やすことで、生徒が緊張感をもって探究に取り組み、積極性を養う狙いもある。

図2 3年生が取り組む「課題研究」のステップ

月	ステップ	内容
4月	課題を設定する	ゴールデンウィーク明けごろまでに課題設定
5月	第1回レポート提出 1分間スピーチ	研究テーマを決定する
7月	第2回レポート提出 (中間論文)	研究の進捗状況を原稿用紙6枚以内に記述し、中間報告を提出
9月	中間報告プレゼンテーション (中間発表)	中間論文の内容をみんなの前で発表
11月	最終論文提出	1年間の研究成果をまとめて、A4用紙で5~10枚の最終論文として提出
1月	最終報告プレゼンテーション (最終発表)	各クラスで代表を決定し、各クラス代表は、学年全体前で発表会に参加。さらに2学年全体前で発表



1学年の「ビジネス基礎」での演習。企業と連携して商品開発や財務分析などを行う。この日はショッピングセンターの設計をグループで考えた。



2学年の「ビジネスマネジメント」での演習。「お弁当の企画」をテーマに、ターゲットやコストも自分たちで考え、利益が上がるお弁当を考え発表した。

図3 「課題研究」の論文テーマ例

論文テーマ
町の書店の減少について
東京ディズニーリゾートに学ぶヒトのマネジメント
音楽は人に貢献している?
マレーシアヤクルトの今までとこれから ~日本企業が海外のローカルブランドに勝つには~
百舌鳥駅に快速電車を停車させるには
バター不足と酪農家について
今後の日本映画宣伝のあるべき姿
通販サイトAmazon.comが成功した仕組み
どうすれば待機児童は減るの? そこから見える日本の経済と実態について



今年度実施した「プライムデー」の様子。「消しゴム版画いかがですか?」の講座で熱心に消しゴムを彫る生徒(上)。「リアルでびっくり!プロフェッサー松浦とわくわく食品サンプル作り体験!」では、博士になりきった先生が食品サンプルの歴史から解説(下)。



オーストラリアの2校の姉妹校と交流体験を行っているほか、連携大学の留学生との交流イベントを実施。グローバル教育とビジネス教育を融合させている。

あらゆる学校活動で探究の姿勢を養う仕掛けを埋め込む

OBFでは、探究型学習の授業だけでなく、教科も含めたすべての学校活動で、生徒が探究する姿勢を養う仕掛けをしている。

「ビジネスは、ある目的を達成するための手段であり、目的は人それぞれで、自分で見つけねばなりません。探究はそのための訓練です。つまり、探究はキャリア教育そのものなんです。生徒が自分の人生や学びの目的、課題を見つけるための材料を、多様に提供できる学校でありたいと考えています」(川口伊佐夫校長)

その仕掛けのつが、昨年から実施している「プライムデー」だ。先生たちが自分の趣味など、好きなテーマについて講座を開く1日限定のイベントで、イ

ンスタ映える撮影方法や、ビートルズについてなど、多様な内容が繰り広げられている。複数講座を実施する先生もおり、全100講座を生徒たちが自由に聴講することができ、学びへの興味・関心を広げることにも役立っている。

「1学期の期末考査後の多忙な時期にもかかわらず、先生たちは楽しんでやっています。校長発案のイベントですが、実は教員自身の探究だったのだ、と思いました」(藤教頭)

「先生たち自身が学びを楽しんでいる姿を生徒に見せることが一番です。本来それが教員になった動機はずで、原点回帰してもらいたかったので」(川口校長)

学校が楽しくなければ生徒に学びの意欲はわかない
また、従来、商業高校の実習は販売

実習がほとんどだったが、寄付金で仕入れた物の販売では身に付くことが少ないと川口校長は考えた。そこで、株式会社形式にし、生徒が自分たちが売りたいものを考え、プレゼンし、生徒や教員から出資金を募って、お金が集まったプロジェクトのみ実施できるととした。

これらの探究を意識した学校活動の根本にあるのが、「新しいものは楽しい気持ちがないと生まれてこない。だから学校は楽しくなければならぬ」という川口校長の理念だ。

「教員は『教える』ことが好きな人になりがちですが、それで生徒は楽しいのか、ずっと学び続けたいと思えていたのかは疑問です。学校は生徒がメインでなければいけません。生徒の内面を揺さぶりながら、学校活動を通してやる気にさせることが教員の役割です。

図4 「課題研究」の生徒の感想(抜粋)

●自分で計画を立てて行動することがとても身に付いたように思います。期限に合わせて放課後パソコンを使って取り組んだり、家でも自主的に取り組むことが多くなったように思います。クラスみんなの発表を聞いて自分とは何が違うのかということも考えました。それぞれいろんな視点で研究していて、退屈だと思えるものは一つもなく、内容が全然違って個性が出てすごいなと思いました。

●課題研究の授業を通して「研究テーマについての知識」「自分の知識・意見を表現すること」「相手への伝え方」を学びました。調べていくうちにどんどん知識を広めることができ、自分も興味を引き出すことのできるよ

い機会だったと思いました。これらを学べたことで、普段の生活の中でも活用できる内容を一年間学んでこられたと思いました。卒業してからも学んだことを活かしてがんばりたいと思います。

●一番初めの1分間スピーチではあんなに緊張していたのに、最終プレゼンでは自分が思っていたよりも長い、7分近くもしゃべったので、今思えばとても成長したと思います。

●自分自身を知ってもらうことが大切だと思いました。知ってもらうことで人の輪も広がっていくし、知識もどんどん増えるのではないかと思います。

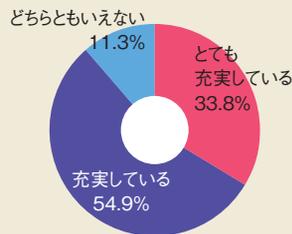
やる気になれば生徒たちは教員の予想を超えた結果を出してきます。だから私は先生たちに、どんな試みでも『やってみよう』と言っています(川口校長)

学びのモチベーションを維持し高めている卒業生たち

自分の頭を使って、さまざまな課題に向かう体験を積んできた同校の生

図5 卒業生の感想

●大学生生活は充実していますか?

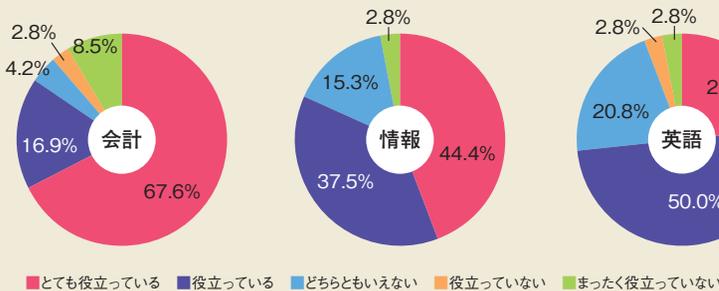


あまり充実していない 0.0%
まったく充実していない 0.0%

●大学進学後に高校時代に学んだ学習で役立った内容は何か? (自由回答)

- ▶課題研究です。この授業で行った企業調査・スライド作成・10分間のプレゼンをしたことが、新商品のアイデアを発表するコンサル基礎演習の授業で役立ちました。
- ▶経営・経済・会計など。商学部で学ぶ基礎を高校の時に学んでいたため、あらゆる講義がとっつきやすかった。
- ▶情報の授業で学んだPowerPoint、Excel、Wordがとても役立った。英語でプレゼンするときに使えます。レポート作成のときも役立ちます。
- ▶マネジメントについて学んでいた知識が大学の経営学講義に活かせ、理解もしやすかった。

●OBFで学んだ「会計」「情報」「英語」は役立っていますか?



徒たちは、「課題研究」を通して確かな成長を見せている。課題研究の感想文には、熱量の高い思いがびっしりと書き込まれていた(図4)。

また、卒業生たちは、進学先や就職先から非常に高い評価を受けているという。ある提携大学では、入学直後の上半期の成績上位5%に、OBFの特

別入学制度の学生が全員入っていたという。川口校長は、探究を通してさらに生徒の「感性」も磨きたいという。自分や相手の立場、社会に対する感性が高くなければ、新しい経験をする際に、自分

探究設計へのヒント

- 1 生徒が自分で課題を見出せるように
さまざまな学校活動ごとに、自分自身で学びのテーマを常に考えさせている
- 2 生徒が主体的に学ぶように
生徒自身の興味・関心とビジネスとのつながりを意識させる授業展開をしている
- 3 学びのモチベーションを高めるために
生徒を表舞台に立たせる機会をたびたび与えている

「探究活動の今後の取り組みとしては、全国の高校とコラボしたいと考えています。47都道府県すべての学校と連携できたらいいですね。国内でも地域が変われば文化も異なります。それが生徒の視点の移動につながり、新たなもの見方を育めると思います(川口校長)

アイデアあふれる校長と、同校のさらなる取り組みに期待したい。

が何をすべきかを察知することができない。多方面から思考し、視野が広がる探究による学びで感性が育ち、それが卒業生たちの学びのモチベーションにつながっていると感じている。

同校の現時点での課題は評価方法だ。現在はテストでの数値評価と、ルーブリックでの評価を4対6で行っているが、評価を生徒のやる気につなげるにはどうあるべきか、比率も含めて検討している。